



世界文学全集 別巻 5

パール・バック

大 地

I

大久保康雄 訳

河出書房新社

世界文学全集 別巻Ⅴ パール・バック I



© 1960

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和 35 年 8 月 10 日印刷

昭和 35 年 8 月 12 日発行

定 価 290円

訳 者 大久保康雄
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 中 内 佐 光
装 幀 原 弘

印 刷：晄印刷株式会社
製 本：新宿 加藤製本工場
本文用紙：日本製紙株式会社
同 納 入：株式会社大和屋洋紙店
ク ロ ー ス：日本クロス工業株式会社
同 納 入：株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の八

電話東京 (291)3721~7
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

大 地 I

第一部 大 地 三

第二部 息子たち 二六三

解 説 (荒 正 人) 四三

大 地 I

ヴァントウイユは、こんなふうにしてあの短い楽節をつくったのである。この作曲家は、いろいろな楽器を用いて、この楽節のヴェールをはぎとって、それを目に見えるものとし、その構想をうやうやしくたどってゆくことに悦びをおぼえたのであり、しかもその手ぎわは実に愛情にみち、実に慎重で、実に繊細、また実能的確だったので、音は、何かの陰影をあらわすためには柔らかにほかされ、何かもつと大胆な輪郭を跡づけなければならぬ時には活気をとりもどしながら、絶えず転調を重ねていったのだ、ということスワンは感じとっていた。そしてこの楽節が現実に存在すると信じたとき、スワンが誤っていなかった証拠ともなるものは、もしヴァントウイユがあゝの楽節の形式を見出してそれを表現するにさいて、あれだけの才能を持ち合わせず、あちらこちらに勝手な思いつきの表現をつけ加えて、おのが視覚の欠陥や手腕の不足を隠そうと努めたならば、そうしたごまかしは、すこし耳のきく音楽愛好者にはただちに看破されたはずだ、ということがある。

第一部
大地

主 要 人 物

王龍(ワン・ルン) 勤勉で土地を愛する貧農のむす子。飢饉のとき南の都会で偶然手に入れた宝石をもとに、つぎつぎと土地を買い、大地主となる。王大人とよばれ、一家繁栄の礎をきづくが、終生土地への愛情を忘れない。

阿藍(オーラン) 大地主黄(ホワン)家の奴隸から王龍に買われて妻となる。無口だが性根のしっかりした働きもの。夫を助けて忍苦の半生をおくる。

叔父 王龍の叔父。怠け者でずるがしこい男。匪賊団ワザクの副頭目となる。

蓮華(リエンホワ) 町の茶館の歌妓。王龍の第二夫人に迎えられる。

杜鵑(ドチュエン) 黄家老大人付きの女奴隸。のちに蓮華の召使として王家に入る。抜け目のない女。

梨華(リホワ) 飢饉の年に王龍があわれんで買い取った美しい女奴隸。晩年の王龍の寵をうけ、その死後は主人の白痴の娘と孫のせむし少年のめんどろをみる。

陳(チン) 王龍の隣家の農夫。

一

王龍^{ワンリョウ}が結婚する日であった。周囲にとばりをおろしたまっ暗な寢床のなかで目をさましたとき、彼には、この夜明けが、なぜいつもとちがうように思えるのか最初わからなかった。家のなかには静まりかえっていて、中の一^{ひと}間をへだてた向こう側の年老いた父親の部屋^{へや}から、弱々しい、息づかいのせわしい咳がきこえるばかりだ。毎朝、最初にきこえるのは、この老人の咳だった。王龍は、いつもならそれをきき流し、横になったままで、その咳が近づいてくるときと、老父の部屋の扉^{とびら}の蝶番^{ちょうぼう}がきしむ音をきいたときしか動かなかった。

しかし、けさはそれまで待っていないかった。とび起きて、寢床のとばりをわきへ押しやった。まだ暗くて、ほんのり赤味を帯びた夜明けである。窓がわりの小さな四角い孔^{あな}に貼^はつてある紙が破けて、ひらひらしているその紙の隙間^{すきま}から、ほの明るい赤銅色^{しやんとくしき}の空が、ちらとのぞか

れた。彼は孔^{あな}のところへ行つて紙を引きはがした。「春だもの、もうこんなものはいらねえや」
彼はつぶやいた。

せめてきょうだけは家をきれいに見せたいものだと思うが、しかし口に出してそう言うのは、はずかしい。その孔は、どうにか手が出せるくらいの大きさなので、彼は手突き出して戸外の空気にふれてみた。やわらかなそよ風が、東からなごやかに吹いてくる。おだやかな、ささやくような、雨気をふくんだ風である。吉兆だ。畑がみのるには雨が必要なのだ。ここ数日間雨がなかったし、きょうもおそらく降らないだろう。しかし、もしこの風がつづいたら、二、三日うちには水が拝めるだろう。よかった。きのう彼は、こう日光が強^{つよ}ぎらぎらと照りつづけたら、小妻は穂^ほがつかないだろう、と父親に話したものである。そしてきょうは、天が彼の幸福を祈つてこの日を選んだかのようだ。大地は実を結ぶだろう。

彼は野良^{のら}良着の青いズボンをはき、青い木綿^{めいめん}の帯を腰に巻きつけながら、急いで中の部屋へはいって行った。からだを洗う湯をわかすまでは上半身は裸のままだ。彼は母屋にもたれかかっている差掛^{さかけ}小屋へはいっていった。そこが台所になっているのである。その薄暗がりの向こうにあるとなりの戸口の隅^{すみ}から、牡牛^{おし}が頭を突き出し、

彼に向かつて低く鈍重な声で鳴いた。台所は母屋と同じように、自分の畑の土を固めた泥レンガで大きく四角に築かれており、屋根は自分たちのつくった小麦のわらで葺いてある。カマドもやはり、いまは長年の煮炊きで焼き固められまっ黒にすすけているが、祖父が若いころ自分の土地の土でつくったものである。その上のカマドの上には深い丸い鉄の大鍋がかかっている。

彼はそばにある土甕から、ひょうたんのヒシヤクで水を汲み入れ、この大鍋を半分ほど満たした。水は貴重なので注意深く汲み入れた。それから、しばらくためらった後、とぜん土甕をもち上げて、水を全部、大鍋にあけてしまった。きょうこそ全身を洗うつもりなのだ。母親のひざに抱かれていた子供のときから以後は、だれも彼のからだを見たものはない。きょうは見られるだろう。きれいに洗うつもりなのだ。

彼はカマドの向こうへまわって行って、台所の隅に立ってかけてある乾いた草の葉や茎を一つかみとってきて、一枚の葉もむだにしないように、たんねんに焚口に積みかさねた。それから古い火打ち石で火を出してわらにその火を移した。やがて火は燃えあがった。

こうして火を起さなければならぬのも、けさが最後だろう。六年前に母親が死んでからは、毎朝、彼が火

を起こしてきたのである。火をつけて湯をわかし、茶わんに湯を入れて、父親の部屋へもって行く。父親は寢床にすわって咳をしながら床の上の靴を探している。この六年間、毎朝、老父は朝の咳をしずめるための湯を息子を持つてきてくれるのを待っていたのである。これでやっと父も子も楽になる。女が家へくるのだ。もう王龍は、夏も冬も、二度とふたたび朝早く起きて火をおこさなくてもすむ。彼は寢床で横になって待っていられるのだ。彼のところへも湯を運んできてくれるだろう。そして、もし豊作だったら、湯に茶の葉を浮かせることもできるだろう。数年前にそうだったように。

そして、女が年老いるころには、子供たちが火を起こすだろう。女は王龍のために、たくさん子供を生むにちがいない。この家の三つの部屋の内外をかけまわる子供たちのことを考えると、その考えにうたれたように彼は手を休めた。母親が死んでからは家は半ばあいてしまつて、つねづね三つの部屋でも多すぎるように思えていた。家族の多い親戚が押しかけてくるのを、彼らは、いつもことわりつづけてきた——際限なく子供ばかり生んでいる叔父などは、言葉巧みにこんなことを言ったものである。

「やめめふたりで、こんなにたくさんさんの部屋は必要ねえ

だろうが。父子おやこいっしょじゃ寝られねえのかね。若いものからだのぬくみは、年寄りの咳せきには、たいへんいいはずだが」

しかし父親は、いつも答えたものである。「わしは孫のために寢床をとつとくのさ。孫が、わしの年老いた骨をぬくめてくれるだろうて」

いま、その孫の生まれるときがきたのだ。それも、たくさんの孫が……壁ぎわにも中の部屋にも孫どもの寢床がならぶだろう。家は寢床でいっぱいになるだろう。王龍が、この半分は空家同然の家が寢床でいっぱいになることを空想しているあいだに、カマドの火は消えて、大鍋なべの湯は冷めはじめた。上着を引っかけてボタンもかけぬ老人の姿が影のように戸口にあらわれた。老人は咳をし、痰たんをはき、息をぜいぜいわせている。

「どうしたんだ、わしの胸をあたためる湯は、まだ沸かねえのか」

王龍は、びっくりして父をみつめ、やっとわれに返って、はずかしくなった。

「焚物たきものがしめつとるで」彼はカマドのうしろからつぶやいた。「しめつばい風が……」

老人は、ひっきりなしに苦しうに咳をしてる。湯が沸くまでは、とまりそうもない。王龍は茶わんに湯をつ

ぎ、すこし間をおいてから、カマド上の棚にのっている光沢のある壺つぼをあけ、乾いて巻きあがっている茶の葉をすこしつまみ出して湯のなかに落とす。老人の目が強くそうに開き、すぐに叱言ちごころを言いはじめた。

「なんでそんなむだなことをするだ。茶を飲むなんて銀を食うのとおなじことだぞ」

「きょうは特別だよ」王龍は、ちょっと笑って答えた。「飲みなよ。気分がよくなるだ」

老人は、ぶつぶつ言いながら、しなびて節くれだった指で茶わんを握りしめたが、もったいなくて飲めないらしく、彼は湯の表面で巻きあがった茶の葉がひろがるのを、いつまでも見つめていた。

「冷めちまうよ」王龍が言った。

「なるほど——そうだな」はっとして老人は熱い茶をすすりはじめた。おいしい食べものをもらった子供のように、すっかり満足そうであった。しかし、王龍が大鍋なべの湯を惜しげもなく深い木桶きづくへあけるのを見のがさなかった。彼は顔をあげて息子むすこを見た。

「畑に水をやらにゃいけねえな、よく実るように」と老人は唐突に言った。

王龍は黙って最後の一滴まで桶にうつした。「その湯、どうするだ」老父がどなった。

「正月からおれはまるでからだを洗ってねえだよ」と王龍は低い声で答えた。

嫁に見せるためにからだをきれいにしたいのだ、と父親にいうのは恥ずかしかった。彼は急いで台所を出て桶を自分の部屋へ運びこんだ。入り口の建てつけがわるいので、戸がはずれかかっていて、きちんとしまらない。

老人はあぶない足どりで中の部屋にはいつてきて、戸の隙間に口をあてて、わめき立てた。

「初手から嫁にこんなふうにさせちゃよくねえだ——朝の湯には茶の葉を入れるし、おまけに洗うといえばからだ全部だなんて」

「たった一日だけだよ」と王龍は大声でどなり返し、それからつけ加えた。「すんだら水は土にくれてやるだ。そしたら、まるっきりむだにもなるめえ」

老人は黙ってしまった。王龍は帯をとき、着物をぬいだ。小さな孔から四角に流れこむ明りの下で、小さい手ぬぐいを熱湯にひたしてしぼり、黒いやせたからだを力を入れてこすった。空気は暖かいと思っていたが、からだが濡れると寒さを感じて、手ぬぐいをひんばんに湯に入れたり出したりしながら、手早くこすっているうちに、全身からかすかに湯気が立ってきた。それがすむと、母親がむかし使っていた箱のところへ行って、青い綿布の

新しい着物をとり出した。綿のはいった冬物でないと、きょうはすこし寒いかもしれないが、からだがきれいになつてみると、急に古い綿入れを着るのがいやになったのだ。いままで着ていた綿入れは皮が破れているし、よごれてもおり、孔から灰色の古綿がはみ出しているのだ。妻となる女とはじめて顔を合わせるのに、綿がはみ出ているようなものは着ていたくなかった。いずれは彼女が洗濯もし、つくろつてもくれるだろうが、最初の日だけは、どうもまずい。彼は青い木綿の上着と、ズボンの上に同じ布地の長衫を着た——一年に十日かそこら、祭日にだけしか着ない、唯一の長い着物である。それから背中に垂れている弁髪を手早くほどき、すわりの悪い小机の引出しから木櫛をとり出して、髪をすきはじめた。

父親がふたたび近づいてきて、戸の隙間に口をつけた。

「きょうは何も食わせてもらえねえのか」と老人は不平そうに言った。「わしみたいな年になると、朝、食うものを食わねえうちは、骨がまるで氷みてえになつてるだよ」

「いま行くよ」王龍は手早く、なめらかに髪をくしけずり、それをふさのある黒い絹ひものように編みあげながら答えた。

そして、すぐに長衫を脱ぎ、弁髪を頭に巻きつけてから、桶をかかえて外へ出た。朝食のことを、まるで忘れていたのだ。トウモロコシの粉を湯がいて、それを父親には食べさせよう。自分は何も食べたくない。敷居のところまでよろよろと桶を運び、戸口の地面に湯をあけた。そのとき彼は、からだを洗うために鍋の湯を全部使ってしまったことに気がついた。また火を起こさなければならぬ。父親に対して、むかむかと腹が立ってきた。

（あの古いぼれは食うことと飲むことしか考えてやしないんだ）と、カマドの焚口のところでつぶやいたが、きこえるような声では何も言わなかった。老人に食事の世話をしやるのも、けさが最後だ。戸口の近くにある井戸からほんのすこしの水を桶に汲んできて大鍋に入れた。すぐ沸き立った。トウモロコシの粉を入れてかきまぜ、それを祖父のところに持って行った。

「晩にや米をたくでな、おとつあん」と彼は言った。「だからけさはトウモロコシだよ」

「米は、ザルにいくらも残ってねえぞ」と老人は中の部屋のテーブルの前にすわり、箸で濃い黄いろいカユをかきまわしながら言った。

「そんなら、春の祭りにや、すこし食うのをへらすことにしよう」

と王龍が言った。しかし老人は聞いていなかった。騒しく音を立てて、カユをすすっていた。

王龍は自分の部屋にはいり、もう一度青い長衫を着て、弁髪を垂らした。剃りあげた額から頬のあたりをなでてみた。新しく剃らせたほうがよくはないかな。まだ太陽は上っていない。妻になる女が待っている家に行く前に、床屋の通りへまわって剃らせる時間はある。金さえあれば剃らせようと思った。腹巻きから、灰色の布地でつくった小さなあぶらじみた財布を引っ張り出して、金をかぞえてみた。銀貨が六枚と銅貨が二つかみほどある。父親にはまだ話していないが、今夜は親しい人々を夕食に招いてある。叔父の子の従弟と、それに父親のために叔父と、それから近所に住んでいる三人の農夫にきてもらうことになっているのだ。町から豚肉と小魚と栗をすこしばかり買ってくるつもりである。できれば南からきたタケノコや牛肉も買って、自分の畑からとれたキャベツといっしょに煮たいとも思うが、しかしこれは、油としょうゆを買ったあとで金が残っていたらの話である。頭を剃らせたら、たぶん牛肉は買えなくなるだろう。しかしまあいい、頭を剃らせようと彼は急に決心した。

老人にはなにもいわずに、彼は早朝の戸外へ出た。暗紅色の暁だが、太陽は地平線の雲をやぶって、小麦や大

妻におりた露に光っている。百姓の習性から王龍はすぐに他のことを忘れ、立ちどまって穂先を調べてみた。妻はまだ実がついていない。雨を待ち望んでいるのだ。彼は大気のおいをかぎ、心配そうに空をながめた。暗い雲、重たげな風、雨はそこにあるのだ。彼は線香を買って、地神の小さな祠にそれをささげようと思った。こんな日には神様にすがりたくなるのだった。

畑のなかの小道づたいに彼は急いで歩いて行った。近くの町の灰色の城壁がつらなっている。その城壁の楼門をはいると、黄家という大地主の屋敷があつて、そこに彼の嫁となる女が子供のときから奴隷として使われているのである。世間ではよく「大家の女奴隷と結婚するよりは独身でいたほうがいい」などと言っている。しかし彼が父親に向かって、「おれはいつまでも女房を持てねえのか」ときいたとき、父親は言ったものである。「このごろのように時世が悪くなつてくると、婚礼にもたいへんな金がかかるし、どんな女だつて、いっしょになる前に金の指輪や絹の着物をほしがるで、貧乏人は奴隷をもらうより仕方がねえだよ」

そして父親は思いきつて自分で黄家へ出かけて行って、あまつている女奴隷はいないだろうかと頼んでみたのである。

「あまり若くねえ女奴隷で、何よりもべっぴんでねえ女を」と老人は言った。

王龍は、べっぴんであつてはいけない、というのが不満だった。他人が祝ってくれるような美しい女を女房にできたらどんなにいいだろう、と思ったのだ。父親は不平そうな彼の顔つきを見てどなりつめた。

「べっぴんの嫁なんぞもらつてどうしようというだ。野良で働きなから家の仕事もすれば子供も生む、そういう女でなくちゃいけねえ。べっぴんの嫁で、そんなことができるか。そういう女は着るものと顔のことしか考えてやしねえだ。この家には、べっぴんはごめんだ。わしらは百姓なんだ。それによ、大家のきれいな女奴隷に生娘がいるなんて、聞いたこともねえ。若旦那がたがみんな手をつけちまうだ。べっぴんの百番目の男になるよりも、醜女でも最初の男になるほうがいいじゃねえか。考えてみなよ、きれいな女が、金持ちの若旦那のやわらかい手と同じように、土百姓のおまえの手をよるこぶと思うか。女を慰みものにする連中の金色の肌と同じように、おまえの陽やけた面を好くと思うか」

王龍だつて父親のいうことは百も承知だ。それでも返事をする前に感情の高ぶるのをおさえられない。やがて彼は乱暴に言った。

「いくらなんでも、あばたとみつ口だけはおれはごめんだ」

「どんなのがくるか、まあ、もらってからのことさ」と父親は答えた。

とにかくその女はあばたでもみつ口でもなかった。それだけはたしかだが、それ以上は何もわからない。彼と父親は金メッキした銀の指輪を二つと銀の耳輪を買ひ、父親がそれを婚約のしるしとして女の所有者の家までとどけた。それ以上は、きょう行けば女をもらええるということ以外、妻となるべき女については何も知らないのである。

彼は冷たく暗い町の楼門にはいった。水を運ぶ人夫が手押し車に大きな水桶（かき）を積んで一日じゅうここを出たりはいったりして、桶から石畳の上に水をこぼす。土とレンガでできている厚い壁の楼門のトンネルは、いつも濡（ぬ）れていて涼しい。夏の日でもひんやりしている。だから瓜の行商人は、ここの石の上にくだものを並べて、しめっぽい冷気のなかで瓜を割って食べさせるのである。まだ季節が早すぎるので瓜商人は出ていないが、小さなかわいい青い桃の籠（かご）が壁にそってならべられ、商人が叫んでいる。

「春の初物だよ——はしりの桃だよ。さあ買った、さあ

食った、こいつを食って腹のなかの冬の毒氣を追っ払ってくれ！」

王龍はひとりごとを言った。

（もし女が桃が好きなら、帰りに手に一杯買ってやろう）
帰りにこの門をくぐるとき、自分のうしろに女がついてくるということが、どうしても実感としてびんとこなかった。

楼門をはいつて右に折れ、ちょっと行くと、床屋ばかりの通りである。まだ早いので、あまり人はいない。早朝、市で野菜類（やさい）を売るために夜のうちに荷を運んできて、これから野良の仕事に帰ろうとする農夫がすこしいるだけだ。彼らは籠の上にうつ伏せになって、ふるえながら眠るのである。いま、籠はからになって彼らの足もとにおいてある。王龍はきょうはだれからも冗談（冗談）なんぞ言われたくないので、彼らにみつからぬように避けて通った。この通りには、ずっと向こうの端まで、腰かけを前において床屋がならんでいる。王龍は一ばん遠くにある腰かけに腰をおろして、隣の男と立ち話（たちわ）をしている床屋に合図した。床屋はすぐにやってきて、火鉢（ひばち）にかけてある湯沸かしからシンチュウの鉢（はち）に、手早く湯を注ぎはじめた。

「全部剃（そ）りますかかね？」職業的な口調でいう。

「頭と顔を」と王龍が答えた。

「耳と鼻の孔（か）の掃除（そうじ）は？」床屋がたずねる。

「そうすると、いくら余分に出せばいいんだかね？」と王龍は用心深くききかえす。

「四銭だね」黒い小布を熱湯につけて、それをしぼりながら床屋が答える。

「二銭にしてくれ」王龍が言った。

「それじゃ、耳と鼻の孔は片方だけですぜ」床屋は即座に言いかえした。

「耳と鼻の孔はどっち側のをやりますかね？」そう言いながら彼は隣の床屋に顔をしかめて見せた。隣の男は、げらげら笑いだした。王龍は、こいつはえらいいたずら好きの男につかまったと思った。しかし、彼はつねづね町の人たちにたいしては、なんということもなく劣等感を感じている。だから、相手がただの床屋で、最下級の人間にすぎないと思っても、やはりひけめを感じて、つい早口に言ってしまったのである。

「どっち側でもいいですだ——どっち側でも——」

そして彼は、床屋がせっけんを塗ったり、こすったり、剃ったりするがままになっていた。この床屋は冗談こそいうが気前のいい男なので、特別の料金もとりもせず、じょうずに肩をたたいてくれ、背中の筋肉をほぐしてく

れた。彼は前額部に剃刀（かみばさみ）をあてながら王龍に話しかけた。

「弁髪を切っちゃったら、いい男前になりますぜ。弁髪を切るのが最新流行でしてね」

頭の上にまるく残っている弁髪（べんぱつ）のそばで床屋が剃刀をひらひらさせるので、王龍は悲鳴をあげた。

「おやじに聞いてからでなくちゃ切るわけにいかねえだよ」

床屋は笑って、そこだけまるく残して剃ってくれた。

それがすんで、床屋のしなびた水だらけの手に、料金をかぞえてわたすとき、王龍は、一瞬ぎくりとした。こんなにたくさんとられるのだ！しかし、ふたたび往来を歩きながら剃りたての皮膚にさわやかな風を感じると、彼はひとりごとを言った。

「たった一度のことだで」

それから彼は市場へ行って、豚肉を百五十匁（もんめ）ほど買い、肉屋が乾いた蓮（は）の葉でそれを包むのを見まもっていたが、やがてちょっとためらいながら牛肉を五十匁ばかり買った。葉っぱの上でゼリーのようにふるえている豆腐まで全部買いととのえてから、ローソク屋へ行って、線香を二束買った。それから、ひどくおずおずと、黄家のほうに歩を向けた。

黄家の門前までくると、彼は恐怖にとらえられた。どうしてひとりできたのだろうか？ 父親でも——叔父貴でも——隣家の陳でもよい、だれかにいっしょにきてもらえばよかった。彼はこれまで大家の門内へはいったことがない。腕に婚礼のごちそうをかかえたままはいって行って、「女をもらいにきました」なんて、どうしてそんなことが言えよう。

彼は門を見つめて長いあいだ立っていた。大きな黒塗りの二つの大きな木の門扉は、いかめしく鉄の飾り鉄をちりばめて、びたりと固くしまっている。石造の獅子が二頭、門の両側に、この家をまもるかのように立っている。そのほかにはだれもない。彼は身を返して歩み去った。とてもだめだ。

急に王龍はめまいを感じた。まずどこかで何か食べよう。まだ何も食べていなかった——食べることを忘れていたのだ。小さな安食堂へはいつて、テーブルの上に二銭おいて腰をおろした。黒光りのする前掛けをつけた小ぎたないボーイがそばへ寄ってきた。彼はボーイに向かつて言った。

「麵を二杯」そして麵がくると、竹の箸でがつがつと口のなかへ押し込むようにして食べた。そのあいだボーイは真つ黒な親指と人さし指で、銅貨をいじくりまわしな

がら立っていた。

「もつとですか？」とボーイは、そっけなく聞いた。

王龍は首を振った。すわり直して周囲を見まわした。この小さな、暗い、そしてテーブルがごたごたとおいてある食堂には知っている人はだれもない。ほんの数人が何か食べたり茶を飲んだりしているだけだ。ここは貧乏人ばかりくる場所なので、彼らのなかでは彼は小ぎれいで、清潔だし、裕福そうにさえ見える。だから通りすがりの乞食が彼を見かけて哀れっぽい声を出した。

「ご親切な旦那さま、いくらでも恵んでやってくださいまし——腹がすいておりますんで」

王龍はいまだかつて乞食から物ごいされたこともないし、旦那と呼ばれたこともない。彼はうれしくなって、一銭の五分の一にあたる銅貨を二枚、乞食の鉢のなかへ投げてやった。乞食は爪のまっ黒な手をのばして、すばやく銅貨をつかみあげ、ぼろ着物のなかへしまいだ。

王龍はすわっていた。太陽が高く上った。ボーイはいらいらとそこらを歩きまわっていたが、「もう何も注文しないのなら」と、ひどく生意気な調子で、とうとう彼は言った。「席料をいただきたいんですがね」

王龍は、そのあつかましさにむっとしたが、立ちあが